

台湾人作家のアイデンティティと 日本の関係について

— 邱炳南を例として —

垂 水 千 恵

[キーワード]

日本語文学、西川満、二・二八事件、アイデンティティ、日本の影響

はじめに

1895年5月の台湾領有直後から、台湾総督府は台湾における日本語教育に着手、1930年代からは日本語による台湾人作家の文学活動も見受けられるようになった。1940年代には『文藝臺灣』『臺灣文學』の二誌を中心として、多くの台湾人作家による日本語文学が生み出された。台湾人が第二言語である日本語で創作せざるを得ない、という植民地的状況に、戦時中の皇民化運動も加わった特異な状況下で生まれた文学であるだけに、台湾人のアイデンティティと日本の関係をテーマとした作品が多い。本稿で論じる邱炳南も、そうした作家の一人である。

邱炳南は1924年3月28日、台南市に生まれた。台北高等学校時代に最年少作家として『文藝臺灣』に参加。1942年10月から1945年9月まで東大経済学部で学んだ後台湾に帰るが、1947年2月に起こった二・二八事件に関係し、香港に逃れる。1954年4月再来日、邱永漢のペンネームで文筆活動を始め、経済関係のエッセイを多数発表していることは周知の通りである。しかし『文藝臺灣』時代の活動はもとより、彼が第34回直木賞の受賞作品である「香港」を始めとした、日本植民地下における台湾人の姿を描いた一連の作品の作者であることすら、忘れられたかの感がある。

本稿では先ず一章において、今まで論じられることのなかった邱炳南の台北

高等学校時代の文学活動について紹介する。次に二章において、「濁水溪」等戦後に書かれた作品の分析を通して、邱炳南のアイデンティティをめぐる葛藤に日本は如何に関係しているのか、という問題について論じる。

1. 台北高等学校時代の邱炳南の文学活動

1-a. 『月來香』における活動

現在確認し得る最も早い邱炳南の作品は1939年5月発行の詩雑誌『月來香 二』掲載の散文詩「四面月光」である。国立中央図書館台湾分館所蔵の『月來香 二』は非常に保存状態が悪く、筆者が閲覧した時は一部綴じられた状態であったので目次に目を通すことができず、邱以外の執筆者としては辛うじて揚雲萍、吉江清景の二人の名前を確認したのみである。編集兼発行人は台北高等学校寄宿舎内の邱炳南となっている(註1)。

「四面月光」は1600字ほどの作品で、雨に降り籠められた「私」は媽祖に救いを求めるが、降り続く雨はいよいよ家をも押し流してしまう。媽祖の名前を呼びつつ濁流に飛び込んだ「私」は、そのまま気を失う。やがて一面の月光に照らされて目覚めた「私」は、月琴のような川の流れを聞きつつ、媽祖へ感謝を捧げるのであった、といったような内容である。

媽祖は福建・台湾一帯に広がる民間信仰の対象で、航海の安全を司る女神、と言って良いだろう。邱炳南の故郷である台南にも大きな媽祖廟がある。媽祖信仰は現在の台湾における「本土化」(註2)の原動力の一つでもあり、台湾を理解する上では欠かせない要素である。筆者にはそうした現在の台湾における媽祖信仰のイメージがあるせいであろうか、「四面月光」の水、月光という耽美的イメージの中での媽祖の登場には、やや違和感を覚える。邱炳南の描く媽祖は、台湾民間信仰における媽祖というよりも、エキゾチックな聖母像に近いのではないか。

台湾の風物をエキゾチックにとらえる視線といえ、西川満の存在を思い出さずにはいられない。「四面月光」発表の直後邱炳南が西川の主催する詩誌

『華麗島』に参加していることから見ても、邱が西川に何らかの関心を抱いていたことは間違いあるまい。西川満は1935年に『媽祖祭』と題する詩集を刊行しており、西川にとっても媽祖がイメージの中核に位置する重要な存在であることは、言を待たない。しかし『媽祖祭』に描かれた媽祖のイメージと、『四面月光』のそれを比べて見た場合、中国的な喧騒さと生命感の躍動の中で媽祖をとらえている西川に対し、邱の場合はもっと静謐なイメージを託している。それは西川が、金紙を焼くけむり、黄燈、火龍といった「火」のイメージを多用するのに対して、邱は雨、川といった「水」のイメージで作品世界を統一させていることから明らかである(註3)。

台湾の風物をエキゾチックな視線でとらえ直す邱炳南の傾向は以下で論じる「廢港」等にも顕著であるが、果たしてそれを西川満の「影響」と断じることができるのかどうかはともかく、それが西川に代表される植民者の視線に重なるものであることは指摘し得るであろう。しかし、詩的イメージの構築力において、邱が西川とは別個の個性を持ち得ていたことは正当に評価すべき点であると思われる。

1-b. 『華麗島』における活動

「四面月光」の次に確認できる作品は1939年12月発行の『華麗島』創刊号に掲載された散文詩「廢港」である。『華麗島』は台湾詩人協会(註4)が発行した詩誌であるが、創刊号しか発行されていない。これは1939年12月に台湾詩人協会が改組され、『文藝臺灣』を機関誌とする台湾文芸家協会が結成されたためである。両誌とも発行人は西川満で、邱炳南もまた両誌ともに会員として参加している。

「廢港」は1400字ほどの作品で、I～IVの4つのパートに分かれている。Iでは真昼の海辺の古城が描写される。「城壁の苔の匂ひ」「くづれおちた煉瓦」「流れない排水溝」「どろんとした運河」といった時間の止まった廃園のイメージに榕樹、牛車、戎克、木蘭、灼熱した太陽といった台湾的イメージが重ねられて、独特の世界が描かれている。海辺の古城とは台南の安平城のことである

うか。Ⅱでは鈴の音、絃の音、歌ごゑ、胡弓といった聴覚的イメージが、やがて「あなたの面影」「あなたの歌ごゑ」といった恋人のイメージに収斂されていく。その他、月光、雨、媽祖といった「四面月光」的イメージも顔を覗かしている。最後に「すすきの間にうづもれて死んだ幻の女」の葬式が語られ、Ⅲへと繋がって行く。この「幻の女」が「あなた」であるのかどうかはわからない。Ⅲ全体は墓場、蒼い血、死んだ鸚鵡、と死のイメージに覆われている。「あなた」はどうやら船を待って狂乱死し、「象牙の戎克」によって海に流されたらしい。Ⅳは毒を吐く紅い花、檳榔の實、赤い瓦、と赤のイメージが支配する。去って行く「棺桶屋の親爺」は葬儀の終りを表現しているのだろうか。

作者は何らかの物語を頭に置いていたのではないかと推察できるが、ストーリー性はあまり強調されておらず、美しく頹廃的な雰囲気構築に力点が置かれている。

1 - c. 『臺灣日日新報』『文藝臺灣』『翔風』における活動

次に邱炳南は発表誌を『臺灣日日新報』『文藝臺灣』（註5）に移し、以下の四篇の詩を発表している。

「夜の頌歌」 『臺灣日日新報』（1940.2.20）

「鳳凰木」 『文藝臺灣』 2号（1940.3）

「戎克」 『文藝臺灣』 4号（1940.7）

「米街」 『文藝臺灣』 5号（1940.10）

「夜の頌歌」は4連12行の文語詩で「ましろなる衣をまとひ」「海を行く」「若人」のイメージが、「鳳凰木」は3連9行の文語詩で昇天のイメージが歌われている。「戎克」は5連25行の口語詩であるが、3連めと5連めで「それはさうでないわたしは思ふのだが」という詩句がリフレインされるなど、やや定型化した韻律を追及しようとしたふしがある。失恋、死の予感が、薔薇の棘、銅鑼、鸚鵡、椰子といったエキゾチックな語彙によって語られている。「米街」は5連21行の口語詩で、定型化、韻律化といった傾向は「戎克」に同じ。朱椅子に座り、長衫を来た中国人女性のイメージが描かれている。『月

來香』『華麗島』時代に比べると、語彙数を押さえ、韻律性を追及しようとする傾向が『文藝臺灣』時代の邱炳南には見られるが、その分イメージの喚起力が弱まった感もある。

『文藝臺灣』の発行は1944年1月まで続くが、1940年10月の「米街」以降、邱の作品は『文藝臺灣』から姿を消す。1940年12月発行の6号までは同人名簿に名前が掲載されているものの、1941年3月発行の7号からは名前が消えている。そして邱が次に発表誌として選んだのは台北高等学校文芸部の機関誌『翔風』であった。邱は『翔風』に以下の4篇の詩を発表している。

「霧」	『翔風』 22号 (1941.7)
「家鴨」	『翔風』 22号 (1941.7)
「雨愁」	『翔風』 23号 (1941.11)
「書物」	『翔風』 24号 (1942.8)

「霧」は5連10行の口語詩。「白い手をそつとひいて」霧の中に消えていった人のイメージが語られる。その人が恋人か、母か、具体的なことはわからない。ただ「廢港」以来死んだ女のイメージが繰り返し顔を見せる点は注目する必要がある。「家鴨」は群衆の中の孤独というボードレールの主題を持つ5連12行の口語詩。かつての華麗な語彙の多用は影を潜め、思索的な傾向が目立つ。「雨愁」は6連22行の口語詩。雨の情景とメランコリックな心情を歌った正に題名通りの内容が、平易な語彙で語られている。「書物」は5連39行の口語詩であるが、一部文語調も混じる。青春の焦燥を読みかけの書物に譬えたものであろうか。「愛されんとして 愛し得ず／憎まんとして 憎み得ず／逃れんとして 逃れ得ず」といった強い感情表現が現れている点が新しい傾向である。

1-d. まとめ

以上が、現在の所確認できている台北高等学校時代の邱炳南の作品である。すべてが詩作品であり、小説は確認されていない。戦後の小説群で強く語られ

る台湾人のアイデンティティをめぐる葛藤を、この時期の邱炳南が如何にとらえていたのかを以上の作品からのみ探ることは困難である。ただ『翔風』移籍後の詩風の変化は、この問題を解く一つの鍵であると思われる。この1941年頃の邱炳南の心境の変化を裏付ける資料として、1941年8月24日付けの『臺灣日日新報』第4面に発表された「文學的處女地」という評論がある。これは現在の所、邱が戦前に発表した散文として唯一確認されているものである。

邱はの中で「黄昏の静かな哀情や滅び行くものへの愛憎のほとばしり」を表現した「頽唐派の文學」が台湾文学の収穫であることを認めながらも、次のように述べる。

…島の中を廻って見給へ、頽唐的雰囲気とは全く別に、未だ小さくて、しかもごく新しいものではあるが、逞しさが息づいてゐる。熱帯的な自然を背景に、逞しい生活が我々の中に生きてゐる。もつと自然主義的に我々の文學はまづ發展すべきだ。

ここで言う「頽唐派の文學」とは、『華麗島』『文藝臺灣』と続く西川満のことであろうし、「四面月光」「廢港」に顕著なように、邱自身もまた台湾の風物をエキゾチックかつ華麗にとらえる「頽唐派」の詩人であったことは間違いあるまい。しかし、「文學的處女地」において邱はかつての方向を全面否定こそしないものの、「熱帯的な自然を背景」とした「逞しい生活」を描く「自然主義的」文学を提唱している。これは同じ台湾の「熱帯的な自然」を描きながらも西川流の植民者の視点ではなく、生活者としての台湾人の視点から描こうとした『臺灣文學』所属の作家たちに近い考えであるといえよう。

この文章が思索的な傾向が現れ始めた「家鴨」と近い時期に書かれていることから見て、この時期の邱炳南に何らかの変化が起こり始めたことは間違いあるまい。それが『文藝臺灣』に参加しながらもその後脱退し、一校友会誌にすぎない『翔風』に発表母体を移したという行動と関連しているか否かは、今後

研究されるべき点である。特に、後に「検察官」「密入国者の手記」のモデルとなる王育霖・育徳の兄弟もまた『翔風』において活動していたことを考えれば、彼らの影響を受けた可能性も当然考え得る(註6)。文学者としては今まで不当に無視されていた邱の研究が進むにつれて、未発見資料が発見され、これらの点が解明されて行くことを期待したい。

2. 戦後の文学活動

2 - a. 概観

1942年10月から1945年9月までの3年間、邱炳南は東大経済学部商業学科に在籍したが、この間の文学活動は確認されていない。戦後台湾に帰国、国民党政権下で台湾独立運動に関与した後、1948年10月には香港に亡命している。その間雑誌『前鋒』に関わったとされているが、邱炳南についてはその政治的立場の複雑さのためか、日本、台湾ともに知名度の割に研究がなされておらず、この香港時代の活動も含めて不明な点が多い。1954年4月に再来日、作家としての活動を開始するまでの12年間の足取りについて、今後諸分野からの説明が待たれる。

1954年1月号の『大衆文芸』に「密入国者の手記」を発表したことから、邱炳南は日本に於ける作家活動を開始した。西川満の回想(註7)によれば、邱は亡命先の香港から手紙で作家となる計画を西川に打ち明け、その意を受けた西川が長谷川伸の新鷹会の席上で代読するなど奔走して掲載を決めたのが「密入国者の手記」であるという。この時から邱は本名の炳南を使わず、ペンネームを使うようになる。「密入国者の手記」発表の時、邱が自分で考えた名は「丘青台」であった。「台」の字に台湾への思いを込めたらしい。しかしその後西川のアドヴァイスによって中国を意味する「漢」を用い、邱永漢と改名したとのことである。なにやら因縁めいた話であるが、再来日前後の邱の台湾への思いをよく表していよう。

来日後1956年2月に「香港」で直木賞を受賞するまでに邱が発表した作

品は以下の通りである。

「密入国者の手記」	『大衆文芸』(1954.1)
「濁水溪」	『大衆文芸』(1954.8～10)
「故園」	『文学界』(1955.3)
「客死」	『大衆文芸』(1955.6)
「敗戦妻」	『小説公園』(1955.8)
「検察官」	『文学界』(1955.8)
「香港」	『大衆文芸』(1955.8～11)
「石」	『大衆文芸』(1956.2)

非常な創作意欲であるというべきであろう。そしてその多くは戦中・戦後の台湾人のアイデンティティの問題を扱った作品である。日本時代にも台湾人のアイデンティティを問う作品が何人もの台湾人作家によって書かれたが、それらは時代的な要請によって、「台湾人は如何に日本人たり得るか」といった単純化された形で問題提起されるのが常であった(註8)。邱の場合は同じ時代を扱ったものであっても、より複雑な作品構造の中でテーマを追及している。戦後15年の時間と状況がそれを可能にしたのか、それとも邱の力量の結果なのか、恐らくは両者なのであろう。台湾人作家によって書かれた日本語文学を日本文学における貴重なマイノリティー文学として位置付けるならば、邱の作品は完成度において屈指のものである。

以下、その中から特にテーマ性の強い「密入国者の手記」「検察官」「濁水溪」の三作品を選び、内容を紹介すると共に、邱にとって日本とは何であったのか、という問題について考察する。

2-b. 「密入国者の手記」と「検察官」

中編小説である「濁水溪」は後に回し、先ず短編から見ていこう。

「密入国者の手記」は不法入国の罪に問われている游天徳という29歳の台湾人青年が、判事に向けて書く嘆願書という体裁をとった小説である。游は「内地人に莫迦にされないような社会的地位を保つ人間」になって欲しいとい

う父の希望通り最高学府に学ぶが、「自分の運命」を「いつも人の手に握られて」いる、という被植民地の人間であるが故の「屈辱」からは逃れ得なかった。そして「屈辱に甘んじてしまう」ことで「保身」を図ろうとする自分たち台湾人は「阿Qの子孫」である、という負の中国人意識を持っていた。しかし戦後の台湾における外省人^(註9)の横暴に対して「社会的な正義」を叫んで立ち上がろうとした台湾人は、「日本の統治を受けているあいだに、日本人とも違うが、そうかといって中国人とも違うべつの新しい民族になってしまったのではないか」と考えるようになる。結局台湾人の蜂起は失敗し、游天徳は日本に密入国する他なかった、という内容が游の一人称で語られている。

戦前においては「阿Qの子孫」という自虐的な形で意識されていた中国人意識が、戦後の台湾の現実の中で「日本の教育を受けたもの」として社会的正義を叫ばずにはいられない「新しい民族」という意識に変化している点が重要であろう。

「検察官」の主人公である王雨新の場合は、もう少し複雑である。彼は植民地台湾においては「法律の鬼となり、それを楯として、剣として、世の不正と闘うことこそ自分の生きる道である」と信じて検察官になった最初の台湾人であると設定されている。「日本人や日本の風物に対してつねに批判的」であり、台湾人に課せられた差別にもその優秀さで立ち向かって来た雨新であるが、日本人闇屋に「チャンコロ」と罵られた時の自分の反応から、彼自身「台湾人であることを致命的な弱点」と感じていたことに気付く。游天徳よりも積極的に法律という普遍的価値にアイデンティティを求めようとしていた王雨新ですら、不完全な存在としての台湾人という時代的感性から完全には抜け出せていなかった、ということであろう。

筆者は先に、日本時代に発せられたのは「台湾人は如何に日本人になるか」という単純化された形での問題提起であった、と述べた。例えば「迷信を焼き拂ひ、陋習を打ち壊」す「同族の心の医者」たろうとしたモダニスト周金波にしても、台湾人でも「歴史による鍊成」によって日本人たり得る、として天皇制原理主義を唱えた陳火泉にしても、彼らの心には完全なる存在としての「日

本人」と、不完全なる存在としての「台湾人」の構図が存在した。彼らはこの構図に基づいて「日本人になる」というテーマを追及したわけである。一方、邱の描く主人公たちは最早日本人になろう、などとは考えていない。しかしそれにも拘らず、不完全なる存在としての「台湾人」のイメージから自由になり得ていなかったのである。

そのことに気付いた王雨新は、以来、法律という普遍的価値観よりも台湾人という民族性を重視するようになる。しかし敗戦後の日本における台湾人の無軌道を目にした結果、「深淵は民族と民族のあいだにのみ横たわっているのではない。深淵は人間そのもののの中に深く根ざしているのだ」という認識に至る。台湾に帰った雨新は外省人の横暴に立ち向かおうとするが失敗、結局二・二八事件のどさくさに紛れて殺害されてしまう。「動乱に乗じて日ごろの怨みを晴らすのが中国では常道であることを知らない台湾人は、その無知のゆえに一死に値する。彼らは中国人でないか、あるいは中国人であっても異端者だ」という苦い認識で「検察官」は終る。

台湾人は中国人ではない、という結論は「密入国者の手記」にも共通するものであるが、「密入国者の手記」には台湾人＝社会的正義を叫ぶもの、というプラスの側面が述べられていた。しかし「検察官」では台湾人＝無知のゆえに一死に値する者、と非常にペシミスティックな見方が述べられている。また「深淵は民族と民族のあいだにのみ横たわっているのではない。深淵は人間そのもののの中に深く根ざしているのだ」という認識も「密入国者の手記」には見られないものである。

こうした違いが、それぞれの作品のモデルの違いに依拠するものであるか、それとも「濁水溪」の執筆を通して、邱の認識が深まったとすべきなのか、現時点では結論が出せない。この二作のモデルである王育霖・育徳兄弟と邱の影響関係については、台湾独立運動の初期思想とも関わる点であるので、今後の研究課題としたい(註10)。

2-c. 「濁水溪」

次に、当時の邱の思想を知る上で最も重要な自伝的小説「濁水溪」を見て行こう。これは台中郊外の田舎街の有力者を父に持つ台湾人の「私」と、台南の医師の息子で日本人を母に持つ劉徳明の二人の青年の、日本・中国に対する複雑な感情を、戦中・戦後の激動の台湾史を背景に描いた作品である。全体は12章に分けられており、1では「私」が台北中学・高校時代に受けた差別的な教育について、2～7は日本、8以降は戦後の台湾を舞台とした二人の青年の友情と離反が描かれている。

その生い立ちにおいて作者自身を彷彿させる劉徳明は日本留学の経験もあり、温厚なキリスト教徒である父と、「すっかり台湾人になりきっていた」という日本人の母の築く円満な家庭に育ちながらも、日本人を憎悪する、強烈な民族主義者である。日本人としての血と、日本に対する反抗の間に矛盾を感じないのか、という「私」の問いに対し、彼は次のように答える(註11)。

…血とは共同の基盤に生きているという意識なんだ。僕は生まれながらに台湾人として育った。台湾人としての民族的な苦痛を嘗めてきたし、これからも嘗めていくだろう。台湾人としての意識しか僕にはない。

ここには自己のアイデンティティに対する邱の考えが明確に示されていると言ってよいだろう。彼はアイデンティティの基盤を「血」に置くことを否定するばかりか、「血」の虚構性をも指摘する。「血」の問題はかつて日本語文学の作家たちを強く呪縛したテーマであった。自伝的作品「道」(註12)の主人公に「日の本の民とは思ふ現身に／その血なきこそ物悲しけれ」という歌を詠ませた陳火泉のみならず、『臺灣文學』で活躍した坂口橘子においてすら、その出発点は混血の問題に悩む高山族の青年を主人公とした「時計草」(註13)であったことを思い出して見るならば、血とは意識である、という邱の認識の斬新さは注目に値する。

一方、その行動の軌跡において作者自身を強く彷彿させる「私」は皇民化運

動下の台湾において、自分は「叛逆者」であるという意識を強く持っている。それはどんなに自由主義的な日本人であっても、「日本人であるかぎり、われわれとのあいだには越えられぬ宿命の一線がひかれているのだ」という、民族意識であると言いかえてもいい。日本の植民地政策が反って台湾人意識を生み出す、というアイロニーは劉徳明にも共通する点である。こうした台湾人意識を持つ「私」は「台湾人も日本人として死なねばならない」という虚構の論理を拒絶し、徴兵忌避者とならざるを得ない。ただし、この時点での「私」の台湾人意識とは中国との一体感に基づくものである。

しかし、そんな「私」ではあるが、いざ日本が負けてみると「心から喜ぶことができ」ず、「心には名状しがたいもやもやがしこりのようにのこってしま」う。そして、外省人の悪政がはびこる戦後の台湾の状況を目の当たりにして、「中国を自分たちの祖国だと考えたわれわれは、結局、台湾人であったのだ」という認識に至る。日本支配の終焉が、「名状しがたい」日本への心理的拘りを自覚させ、祖国中国への政治的復帰が、中国人としての意識を捨てるに至らせる、という二重のアイロニーの中で「私」は「日本人でも中国人でもない台湾人」というネガティブなアイデンティティを選択するのである。

「中国を自分たちの祖国だと考えたわれわれは、結局、台湾人であったのだ」という「私」の認識は、「密入国者の手記」の游天徳にも共通するものである。しかし、過酷な現実の前に途方に暮れる游天徳に対して、「血縁や親分子分の関係を経とし、金銭を緯とする中国社会」で「政治を動かせるような金力」をつかむために、「永遠に地球をさまようユダヤ人」になろうと香港へ亡命して行く「私」には、新しい方向性が示されている。「私」は言う。

昔の私は私の恋人だった。その面影を私は愛した。初恋の人がいつまでたっても忘れられないように、いずこへともなく消えていった昔の私を私は懐かしがった。

こうした「私」の「昔の私」に対する愛は、「私」から離れて行こうとする

劉徳明への愛でもある。終章において「私」は徳明に語りかける。

僕たちは同じ一人の人間だ。一人の人間が二人の姿になって現れたにすぎないのだ。(中略)なぜ僕たちはべつべつの生き方をしなければならないんだ。なぜ一緒には生きていけないんだ！

しかし徳明はその声に答えず、絶望した「私」は一人香港へ向かうのである。

「私」と徳明の二人の登場人物が分身同士であることを、語り手の「私」自らが語り、そしてそれを徳明が拒絶するという「濁水溪」の構造をその後の邱の生き方と比較した時、深い感慨にとらわれるのは筆者ばかりではあるまい。引き裂かれた自己に対する透徹した邱のまなざしは、「濁水溪」執筆の時点ですでに文学との訣別を予言していたように思えてならない。邱の短い作家生命を惜しみ、「異色の台湾作家として、台湾のことを日本から見つめて書き続けてほしかった」(註14)と願う岡崎の思いは痛いほど理解できるが、小説を書き始めた時点ですでに自己の謎を解読し終わっていた邱にとって、文学は長くとどまる必要のない世界であったのだろう。

2-d. まとめ

陳火泉などの皇民文学者と違い、邱炳南にとって「日本人」とは求めるべきアイデンティティの対象ではなかった。だからといって、彼のアイデンティティ獲得の過程に日本が何ら関係しなかったと言うことはできない。邱の作中人物達は、まず政治的に与えられた「日本人」という国籍を否定することで、「中国人」と自己をアイデンティファイし、次には現実の中国人との差異を知った後で「中国人」でも「日本人」でもない「台湾人」というアイデンティティへ辿り着く。つまり、日本統治という因子が「中国人」ではない「台湾人」を造り上げた、という消極的な形で邱はアイデンティティ形成における日本の影響を認めているのである。

しかし、この「中国人でも日本人でもない台湾人」という定義も、邱の最終

的な到達点ではなかった。彼は民族や血に自己のアイデンティティを置く事を拒み、「永遠に地球をさまようユダヤ人」になろうと亡命する。すべての所属を断ち切った「亡命者」こそが、邱炳南の最終的に定義した自己像であるといえよう。

最後に

以上、邱炳南の戦前・戦後の作品を通して、彼のアイデンティティと日本の関係について考察して来た。

「濁水溪」において表明された「血とは意識にすぎない」という認識、或いは「検察官」において語られた「深淵は民族と民族のあいだにのみ横たわっているのではない。深淵は人間そのものの中に深く根ざしているのだ」という認識は、日本との関係の中でのアイデンティティの模索をテーマとしてきた日本語文学の中で現れた、最も深遠なる思想であろう。戦前の日本語文学の最高峰とも言える王昶雄の「奔流」(註15)においてすら、民族意識そのものを否定する方向性は示されていないからである。また、民族対立が新たな世界的課題となった1990年代の文脈においても、40年前の邱を凌ぐ思想を持つ日本文学はまだ生まれていないと言っていい。

こうして考えてみると、邱炳南は遅れて来た日本語文学者であると同時に、早すぎた日本文学者でもあったと言える。現代の文脈における邱作品の読み直しを諸家に望みたい。

なお、最後に今後の研究課題を示しておくならば、まず邱炳南がどの段階で1950年代の作品に現れた認識に達したかを資料的に裏付けていく必要がある。現存する戦前の詩作品にその思想的萌芽を探ることは困難であるが、『翔風』時代の詩風の変化及び「文學的處女地」で示した方向は、見逃すことの出来ないサインであるといえよう。今後、現在空白となっている東大・香港時代の資料、及び台北高等学校時代の他の資料の発見を切に希望する次第である。

- 註1 『月來香 二』に先だって1939年2月に発行された『月來香 一』の発行人も邱になっているが、こちらには邱の作品は掲載されていない。
- 註2 「本土化」とは、1980年代の台湾民主化の動きに伴って出て来た、かつては中華文化の影に隠れて積極的に評価されて来なかった台湾固有の文化を評価し、そこに台湾人としてのアイデンティティを置こうとする文化的・政治的ムーブメントである。
- 註3 参考までに媽祖に関する二人の描写を一部引用しておく。
- ・川の水はその間をくゞって琴を弾じ、月の光は何時…か私…銀色にかゞやいた。もう私に、思ひのこすこともなかった、……なかった。媽祖への感…祈りは月の光となつて、蟲の聲となつて水草の間を彷徨よ…、夜の空に響き渡った。(邱炳南「四面月光」／…は原文不明箇所)
 - ・ありがたや、春、われらが御母、天上聖母。媽祖さまの祭典。神神の卜卦。天地ここに霊を醸して、夕、金亭に投げる大才子。花月の、空飛ぶ鳩か、わがころ。(中略)花が降る。火龍が踊る。媽祖宮の、芸閣の中に、なにごとぞ、群衆わけて逃げゆく男。(西川満「媽祖祭」)
- 註4 1939年12月発行の『華麗島』創刊号の巻末の会規に拠れば、「臺灣在住並に臺灣出身の詩人及び文藝家」で構成された会で、詩に関する研究と、詩誌の発行を主な活動として定めている。結成時は不明であるが、柳書琴作成の『臺灣日日新報』目録によれば、「近く結成される臺灣詩人協会」の記事が『臺灣日日新報』1939年8月4日に掲載されているので、大体8月～9月頃と考えられる。創刊号巻末の1939年10月末現在の会員名簿には日本人22名、台湾人11名の名が記されている。西川、邱は言うに及ばず、「検察官」のモデルとなった王育霖の名前も見受けられる。なお台湾詩人協会の改組、並びに台湾文芸家協会の結成の事情について

ては、1939年12月5日の『臺灣日日新報』参照。

註5 『文藝臺灣』は1940年1月に創刊された台湾文芸家協会の機関誌。
1941年3月発行の7号よりは「文藝臺灣社」発行の同人誌として、
1944年1月発行の38号までが刊行される。詳しくは河原功「中国雑誌解題『文芸台湾』」（『アジア経済資料月報』1975.2）参照。

註6 王兄弟の『翔風』掲載作品は以下の通り。

王育霖「明日を期する者」（『翔風』17号1938.2）

王育霖「台湾歌謡考」（『翔風』18号1939.1）

王育霖「台湾随想」（『翔風』20号1940.1）

王育徳「台湾演劇の今昔」（『翔風』22号1941.7）

王育徳「過渡期」（『翔風』24号1942.8）

なお「文學的處女地」の存在は柳書琴作成の『臺灣日日新報』目録の
示唆によるものである。

註7 「耳をつけた話」（『アンドロメダ』1988年12月号）

『アンドロメダ』は西川の主催する日本天后会の機関誌的性格の雑誌
である。

註8 日本時代の台湾人作家のアイデンティティ追及の問題については、拙
稿「三人の『日本人』作家」（『越境する世界文学』河出書房新社1992.
12）参照。

註9 第二次世界大戦後台湾に渡った中国人のこと。

註10 王育徳は「兄王育霖の死」（『台湾青年』6号1961.2）の附記として
「なお、邱永漢氏の＜検察官王雨新＞は王育霖をモデルにしたもので
あるが、相当に「小説風」に潤色しており、すべてが事実ではない。
念のため。」という一文を記している。また岡崎郁子の王育徳未亡人
インタビューによれば、王の一族は小説のモデルとされたことに憤慨
していたと言う。（「二・二八事件と文学」、『季刊中国研究』24号1992.
7）

註11 『芥川・直木賞受賞者総覧』（教育社1992.7）によれば、父は丘清海、

母は八重とのことである。邱が父母について語った文章は、現在の所未見であるので、劉徳明の生い立ちがどこまで自伝的なものであるかは判断できない。

註12 陳火泉の自伝的小説で、皇民文学の代表的作品の一つといえる。『文藝臺灣』6巻3号(1943.7)に掲載の後、1943年12月に臺灣出版株式会社より出版。

註13 坂口禰子は戦前の台湾で活躍した作家で、張文環、楊逵などの台湾人作家とも交流があった。「時計草」は『臺灣文學』2巻1号(1942.2)に掲載の予定であったが、検閲のため、その大部分を削除された。「時計草」の問題については、1993年6月27日の第3回天理台湾研究会での筆者の口頭発表を参照。

註14 岡崎郁子「二・二八事件と文学」(『季刊中国研究』24号1992.7)

註15 『臺灣文學』3巻3号(1943.7)。詳細は拙稿「三人の『日本人』作家」(『越境する世界文学』河出書房新社1992.12)参照。